

## カントの先天總合判斷の最高原則について（承前）

大 西 友 太

### 二

直覺的悟性の總合に於て眞の先天總合判斷を見ねばならぬ論理の必然を有する限り、カントの先驗論理の範疇の先驗演繹論は思辨論理の範疇の辨證法的演繹に變らねばならぬのであつて、その限りカントの『先驗分析論』の原則即ち總ての對象は可能的經驗に於ける直觀の多様の總合的統一の必然的制約の下に立つといふ原則は直覺的悟性に於て見る絶對自我の自己否定に於て見る客觀的實在の內在的合理性を示すものとして演繹の客觀的方面を示すものとならねばならぬ。實體自らが內在的總合原理として客觀的存在を構成することを明らかにするのがこの原則であつて、この原則に於て見る自我の自己否定を否定して絶對自我の自己肯定に於ける絶對思惟に歸るところにカントの思惟の明證及びその眞理の客觀的保證が見られるのである。

しかし私のこの觀察に對して一つの非難を加へるものがあるかも知れぬ。即ちカントが直覺を以て出發するものであるとすることは先天總合判斷の可能を以て出發することと相容れないことであ

つて、直覺を以て出發する以上先天總合を以て既にその中に解決されて居るといふことを承認するものであるといふ非難これである。カントが分析的制約に於ては眞の先天總合判斷が見られぬから總合的制約に進んで改めて先天總合判斷を見ねばならぬとする論理を理性批判の根本的生命として第一版に於ては感性と悟性との根源たる「心」の根本能力に溯つて總合を考へ、殊に第二版に於てはこのことを論理的に明らかにするために分析命題の總合の批判から神的若しくは直覺的悟性に溯つて先天總合判斷を見ねばならぬことを批判の根本的要求として主張する以上は、これは明らかに總合の起原を直覺に求めるものであつて、直覺に於て豫め解決されて居るために先驗論理的に可能であるとすゝるものでなければならぬから、カントは先天總合判斷に哲學の可能を求めるけれども、實はこの判斷は豫め可能を承認せられて居るから可能であるといふ同語反覆に陥り、その批判に一つのアポリアを與へるものといはねばならぬ。この點は明らかにカントに對する非難となり得るものといへる。併し實際カントは直覺的悟性に先天總合判斷の可能を求める點に於てその範疇は先驗論の範疇よりも思辨論理の範疇となつて居るのであるから、カントに對するこの非難は當らぬのであつて、カント自身この悟性の直覺以上に總合を明らかにする點において認識の根本問題を解決せねばならぬ立場にあるのである。勿論「心」若しくは直覺的悟性はその直覺的なるために直觀することが同時に思惟することであつて、直觀によつて同時にその對象が與へられるに違ひないのであつ

て、又論理的に見てもそれが推論であるためには「心」の根本能力たるの特質としてこのことは承認せねばならぬところである。加之、論理的説明が心理的説明と異なるべき特徴としては是非ともこの直覺がその直覺たるの性質から見て質料でもなければ範疇でもなくこの兩者の統一としての意味ともいはるべきものであることを承認せねばならぬ上に、一體この意味なるものの前提は原則的には與へられざるものであつて、意味なきところから意味を生ずる絶對的起原を認めねばならぬのであるから、今もいつた如く總合によつては説明すること能はざるものであるけれども、その前提によつて説明されざる絶對的起原である點に於て内感の時間によつて表象されるといふことを唯一の手懸りとして演繹することは出来るのみならず、一體それが論理的のものである限りこの外には説明の方法のなきものである。この方法を探つて進んだのがカントの先驗演繹であつて、『先驗分析論』の演繹がこの點に於て批判哲學の認識論として古今に秀でたるものであることは既に述べた通りである。併し嚴密に論ずるときはこの場合の内感の時間はこの絶對的起原の意味に係るものである點に於て感性的直觀の時間ではなく理智的直觀の時間でなければならぬのであるから、カントはこの時間が直觀の受容性を有するといふことを手懸りとして經驗の先驗演繹をなしたのであるけれども、この演繹の眞理として今もいつた思辨論理學の範疇の理智的時間を必然的制約とする演繹がなければならぬのであつて、この演繹に於てカントは直覺的悟性に於ける統一即ち直觀と思惟と

の根源的統一としてこの兩者より高き立場にある意味を只心理學的一般概念として説明する以上に哲學として説明するを得る筈である。

この點に於てカントの演繹は實はその本質に於ては思辨論理學の範疇の辨證法的演繹となつて居らねばならぬのであつて、カントの特徴はこの場合にも明らかに先驗論理の範疇の演繹の場合と同様に總合の必然的制約を明らかにし、隨つて先驗統覺の必然を以て客觀を明瞭にするにある。たゞカントの缺點はこの場合にその時間概念を十分明らかにして居らぬといふこと、及びその範疇の思辨論理的性質を十分明らかにして居らぬといふことにあるのであつて、自然それから生ずる演繹概念の曖昧は免れぬ。第一この場合の時間は元來比量的悟性の總體性のイデアを直覺的悟性の全體性のイデアに止揚せる立場に於て觀察さるべきものであるから、「心」は感性的制約の無限系列を測れる點に於て見らるべき無制約者として考へられるには違ひないけれども、その無制約者といふことは只時間の無限に於て示し得るものではなく、この時間の無限の根柢に於て永遠に實在する全體者に於て示されねばならぬのである。時間の無限系列に於て示し得る部分の無限的多様はこれによつて全體それ自身であり、獨立の事物それ自體であり得る。多様は自己自身の中に集中されたる統一を有せる全體である。直覺に於て絶對的起原を有する意味は質料でもなければ範疇でもなくこの兩者の統一せられたるものとして最も充實せる意味の存在でなければならぬといはれるのもこのため

である。隨つて「心」の根源的統一としての直覺的悟性の範疇は最早分析的先驗論理の範疇ではなく、全く思辨論理の範疇でなければならぬのであつて、その演繹も必然的に辨證法的でなければならぬと共に、その必然的制約の時間は又單なる内感の時間といふよりも以上に辨證法的否定の時間でなければならぬのであつて必然的に空間の内在を豫想する。カントは内感の自我の時間が直觀の受容性を有するといふことを手懸りとして演繹したけれども、只この時間によつて演繹するのみであるならばその多様は單なる多様であるを免れぬ。時間に内在する空間を圖式とする多様であるためにその部分に永遠の具體的一般者の個體的存在を與へ、判斷を超越するといふよりも自己自身の中に判斷を成立せしめ、自己自身に同一なるものとして自己自身の述語となり得るものであり得るのである。

この點から見るときはカントが數學的原則による演繹が現象一般に止まるに對して力學的原則による演繹に個別的意味を認め、理知的起原による新要素の發生を承認して居るといふことは最も注意すべきことである。尤もカントは『純粹理性批判』に於てこのことを論じたのは『數學的先驗的觀念の解決に對する結語及び力學的先驗的觀念の解決に對する序語』に於てである。理性批判としては必然的體系を以て組み立てられて居るといふよりも寧ろ數學的原則の演繹に於ける缺點の自覺として現はれて居るといつてよいのであつて、カントがこのことを體系的必然を以て論じたのは『判

『斷力批判』に於てであるから『純粹理性批判』全體を支配する意見ではなく、況んや『先驗分析論』の意見ではないといへる。併し直覺的悟性に總合判斷の起原を求めるとしてはその内的規定の時間關係に於て絶對的起原の新要素の發生を認めるのがその本來でなければならぬから、この『先驗辨證論』に於けるカントの力學的意見は『先驗分析論』の初めから抱けるところであるといはねばならぬのみならず、一體この絶對的起原の意味もそれが生成するものである限りに於てはなほ眞の永遠を示すものでないから、この時間に於ける因果系列の新要素の發生に對してカントがなほ同時存在の原則を認め、因果の時間繼起の證明の根柢になほ同時存在の實體的證明を置き、時間を手引きとする絶對自我の先驗演繹の根柢に空間の同時存在の眞理を認めて居るといふことは當然でなければならぬのであつて、總合命題に於ける總合判斷として質料でもなければ範疇でもなく、この兩者の根源的統一の意味に於て新らしく範疇の起原及びその演繹の根據を發見せねばならぬカントとしては内感の時間を圖式として演繹を試み、隨つてその限りに於て新起原の因果を認めるのは當然であるけれども、この因果に於ける新起原もなほ永遠の絶對その物を示すものではないから、カントは眞の永遠として時間に内在するものに着目して因果の實體的證明を採るに至つたものと考へられる。統一的起原の心理的説明ではなく論理的説明であるためには質料と範疇との根源的統一の意味については意味なきところからの意味の發生を認めねばならぬ。その限りカントの範疇は既にも

いつた如く分析的先驗論理の範疇よりも思辨論理の範疇として辨證法的演繹の原理でなければならぬと共に、その必然的制約をなす時間も亦この意味の絶對的起原を示すに足るものでなければならぬから單なる時間であることを容されぬ。永遠といへば絶對起原の意味の生成の時間ではなく、この時間に於ける永遠でなければならぬ。時間は永遠ではなく、永遠は時間に於てあるものでなければならぬ。この永遠に於てある時間に於て初めて時間に於ける絶對的起原の意味の發生を考へることが出來、生成の最後の基體としての現在を見ることも出來る。即ち一切の時間的變化の最後の規定的根柢を見ることが出來るのである。カントが因果律を時間の持續繼起及び同時存在の原則に基いて證明し、結局因果律の實體的證明に進んだ所以はこゝになければならぬのであつて、その限りカントの演繹に於て見られる客觀的對象は全く絶對自我の自己否定に於て肯定さるべき物自體的存在として永遠の實在を示し得るものでなければならぬ。吾々が居なくとも永遠に存在し、然も自己自身によつて自己の述語を作つて往く内在的合理性の總合原理によつて統一されたる永遠の實在を示さなければならぬ。全く實在それ自身がその内在的總合原理によつて自己を永遠に構成するものでなければならぬ。存在は判斷を超越するものではなく、それ自身判斷を成立せしむるものであつて、一切の述語を自己自身から發生せしむるものであるといふのが辨證法的演繹に於て見るところの客觀である。

絶對的意味の存在は直觀でもなく思惟でもなく本來この兩者を超越して内在的にこれを有する絶對であつて、それ自身存在なきところから發生するものでなければならぬ。随つて存在は一切の定立を無に歸せしむるものとしてそれ自身絶對無といふの外ないものであるから、一切の存在はこの無から見れば全く自己否定に於てあるものでなければならぬけれども、この無が自己否定に於て一切の存在を肯定し得るためにはそれ自身一切の存在を内含するものでなければならぬ。しかし只即自的絶對に於てこれを内含するといへばその形相的單一的統一に於て何等の思惟をも現實的に有し得るものでない。一切の存在の原因であるためには事實的個別體に於てこれを有し、有限的存在を内在的總合に於て規定し得るものでなければならぬから、その限り思辨論理の範疇は個體の範疇であることを必要とする。

變化は基體に於てのみ可能であるといふのがカントの『經驗の類推』の第二證明であるが、この命題の如く實體が變化の基體であり得るについては實體それ自體が常に新らしき意味の起原をなすものとしてその變化系列の各瞬間に於て新らしき存在を與へる非合理性のものであると共に、實體それ自體は又何等の變化をなさぬものであり、一切の變化の中にあつて變化せぬものでなければならぬ。變化するものが變化するものの原因であるといふことは只變化の系列を無限に延長するといふだけのことであつて、變化の原因を明らかにするものでない。これがカントが因果の時間繼起の證

明を實體の同時存在の法則の證明に移した所以でなければならぬが、勿論この變化せぬものといふことは時間性に於てはいはれぬことであり、只空間性に於てのみ言はれることであつて、その限り變化の基體と呼ばれるものは一切の定立を無に歸する絶對無とも呼ばるべきものであると共に、この定立を理性的關係に於て有し、一切の變化を否定すると共にこれを肯定的に發生せしむるものでなければならぬ。この點に於てカントの變化の基體は一切の時間を否定する空間に於てあるものであると共に又これを肯定する空間に於てあるものでなければならぬのであつて、この否定と肯定との媒介をなす範疇は勿論思辨論理の範疇として實體といつても範疇表に見るところのものとは全く異なる個體の範疇でなければならぬ。

勿論カント自身このことを明らかに論じて居るといふのではない。第一カントはその圖式論に於て空間圖式のことを外感に對する量の認識の外には全く論じて居らぬ。隨つてその限りに於てカントの先驗演繹は只その表面のみから見るときは諸種の矛盾と不徹底とをもつて居る。最も本質具體的なる「心」の根源に溯つて先驗演繹を試みながらその範疇が個體の範疇であることを明らかにせずして只分析的先驗論理の範疇として演繹するから、先驗統覺の必然を以て現象一般を演繹し得るに止まり、『現象體と理體』に於けるが如く『先驗分析論』一般の特徴であるかの如くに現象體の認識のみを高調しながら純粹悟性認識を以て現象解明の原理につきるものではないといふ説をなすやうに

もなる。思ふにカントがその圖式論に於て空間圖式のことについて論じて居ないのは恐らく『先驗感性論』に於ける内的規定に屬するものは總て時間關係によらねば表象されぬといふ意見を過重視して居る結果に外ならぬのであつて、この命題はいふまでもなく批判に於ては最も重要なものとして尊重し遵守せねばならぬところであるには違ひないけれども、既に私の批判した如くこの時間關係に於てはカントがその總合命題の總合判斷に於て最も重要視するところの根源的統一の絶對自我その物の永遠を示すには足らぬのである。イデアに於て有限がその真理に達するといふことは總ての思辨哲學の真理であると共にカントに於ても同様にその批判の中心命題とならねばならぬのであるけれども、時間概念のみではこのイデアとしての無限に達して真理その物を見ねばならぬといつても、只これを極限に於て見るのみであつてこの無限の真理がエクジステンツとして存在論的に實在せねばならぬ、然も内在的合理性に於て實在せねばならぬといふことは見られぬ。真理その物の經驗といふことは永遠に見るべからざるイデアとならねばならぬ。物自體がイデアとして非合理性の極限に追ひ遣られて終ふ缺點のあるのもこのためである。併し物自體ともいはるべきものが若し客觀的事物の本質自體であるならば、カントの批判に於ては是非ともこれを有限の存在その物に内在して有限を無限の真理その物によつて規定し、隨つてまたそのイデアとしての非合理性をエクジステンツとしての内在的合理性に轉廻してその内在的總合に於て有限を見ねばならぬ筈であると

共に、若しカントの範疇が思辨論理の範疇であるならば、その『經驗の類推』に於て見る原則は實體の内在的總合原則としてこの點に於ける特色を示さねばならぬ。勿論物自體と實體とは同一でない。併し直覺的悟性の總合に於て範疇表に見るところの實體の範疇と異なる新らしき範疇を採用して思辨論理學的演繹の原理となさねばならぬ必然にあるカントとしてはその實體の範疇は物自體のそれと異なるものではないのであつて、因果の時間繼起の原則を實體の同時存在の原則に移せるカントの『經驗の類推』は事實に於てこの物自體の内在的總合の原則を明らかにし、イデアとしての非合理性の物自體をエクジステンツとしての内在的合理性に轉廻して絶對自我の思惟の契機を明らかにするものでなければならぬのである。

カントはこの類推に於て力學の原則を以て知覺の構成的制約として居るが、カントの批判の本來からいふときはこれは有限の根柢に無限の内在的總合があるといふことを證明する點に於てその論理を鮮明にするものでなければならぬのであつて、總合命題に於ける總合の眞理は感性と悟性との根源に溯らしむるけれども、その範疇は心理學的一般ではなく思辨的論理學的範疇でなければならぬのであるから、知覺の構成の制約に關する原則の如きものは必ず直覺的悟性の總合に於て觀察し、隨つてイデアをエクジステンツとして見る内在的合理性を明らかにせねばならぬ。然らずしてはカントがこの類推に續ける『經驗的思惟一般の公準』に於て現存在の事物の總合原則を論ずると

か、又この公準の附録として第二版に於て『觀念論論駁』を加へて客觀的實在の事物を承認し、隨つてそれ自體存在し、自らその存在を固有の方法によつて作つて行く事物の非合理性を認めながら、その非合理性を以て一切の述語を自己自身から發展し判斷を可能ならしめるものとして内在的合理性に轉釋するといふやうなことは全く理解すべからざることである。これ等の諸節はこの點に於ては知覺の非合理性をエクジステンツの内在的合理性に轉廻せる點に於て最も大なる特色をもつものといはねばならぬ。それだけにカントの原則は演繹の客觀的方面を解するに止まるからなほこれを主觀的方面に止揚して考へねばならぬことは勿論であるけれども、兎に角カントが因果の時間繼起の原則を實體の同時存在の原則に於て證明せる企圖は時間の無限もなほ眞の無限永遠とするに足らぬから時間に内在する空間に於て無限永遠を認め、その内在的總合に基く有限の眞理を明らかにせんとする企圖を示すものでなければならぬ。少くとも吾々はかく觀察するときカントの批判が到達すべき思辨論理學の範疇の意味は充實せられるものと思ふ。

内的規定に屬するものは總て時間關係に於て表象されるには違ひないけれども、一體この時間は既に述べた如くに永遠ではなく、永遠は時間に内在する唯一の眞理でなければならぬのであつて、この永遠なるものは一切の時間的なるものを生ずるのであるから、總て時間關係に於て内的規定に屬するものを見るといふことはカントの觀念論を徹底する所以ではない。時間も空間も純粹直觀の

多様を先天的に含むことカントのいふ通りであるけれども、その含むべき形式が異なり、時間の總體性を全體性に於て包むのが空間でなければならぬから心性の受容性の制約としては全く異なつて居らねばならぬのであつて、カントの演繹の本來ではこの全體性の受容性を圖式的限定とせねばならぬ點に於て變化現象に對應する永久實在の實體それ自體のエクジステンツが問題とならねばならぬ。否、物自體その物のエクジステンツが問題とならねばならぬ。このエクジステンツに於て物自體の非合理性をその内在的合理性によつて規定してそれが思惟の契機であり得ることを示すのがカントの哲學に於ける最も重要な事業の一つでなければならぬのであつて、内感の自我の時間が直觀の受容性を有するといふことを手懸りとして分析的先驗論理的に演繹するのみなる限りでは折角總合命題の根源に達しながらこれを現象界に誘ひ出して來るのみであるから、所謂先驗統覺の必然を見るを得てもその構成は全く現象に限定せられてこの根源その物及びその思惟の明證又は眞理の永遠といふ如き觀念論の最も重要な根本問題には一切觸れるところがなくなつて終ふ外ない。

内感の時間を手懸りとする演繹に對するカントの批判の自信の強きことは何人もよく知る通りであつて、この點に於てはカントは先驗統覺の必然を以て古き形而上學を擊破して居るといつてよい。カントは『現象體と理體』に於て悟性はその先天的原則を経験的に使用し得るのみであつて、先驗的に使用することは出來ぬ。即ち物自體に適應することは出來ぬと論じて居る。この議論は哲學

の原理を以て原則的に理解し得べきものとする經驗論の背面に絶對實在の把握すべからざるものを置く點でアポリアを藏するものといはねばならぬけれども、もとカントがその批判に於て有限の根柢に於て無限に達し、無限その物の眞理性によつて一切の認識問題の解決をなすべき立場に達しながらその無限永遠を分析的先驗論理の範疇として内感の時間規定に於て演繹する限りに於ては全く止むを得ざることである。併しカントがこの演繹法を以て進む場合に於てもその時間概念の必然上空間の内在を認め、随つて又その分析的先驗論理の範疇を思辨的論理學の範疇に轉廻し、その限りに於てその演繹概念を全く辨證法的に一變せねばならぬのであつて、その結果は必然的にその認識すべからずとする物自體の非合理性を客觀的實在の内在的合理性に於て現はにせねばならぬのであるから時間による絶對の限定的實現としての部分に對して全體の意味を與へ、全體の内在的規定として個體的存在を認めると共に、物自體のイデアとしての非合理性を内在的合理性に於て否定するだけの立場はカント自身の明らかに獲得するところである筈である。イデアに於て一切の有限が無限に達しその限りに於てイデアに於て一切の解決をするのであるけれども、そのイデアたる限りに於てなほ非合理性の絶對である。これを内在的合理性のエクジステンツに於て顯現する點に於てカントの批判は最も大なる特徴をもたねばならぬのであつて、この外にカントが總合命題の總合判斷に於て哲學の眞理を發見せんとして論理的必然を以て直覺的悟性の總合判斷に進んで客觀的實在の

原則を明らかにせることは理解されぬ。

カントが現代の存在論哲學に最も大なる關係を有するものこの點に於てである。勿論現代の存在論哲學は人間學的存在論からこゝにいふエクジステンツとは全く異なるものである。こゝにいふエクジステンツは自然の合目的性的見方に對する體系的目的論的見方の事物の現存在に於ける内在的合理性をいふに過ぎぬ。しかしこの合理性に於けるエクジステンツが思惟の契機であることを明らかにして絶対自我の絶対思惟その物を見、この思惟に於て客觀それ自體が如何に規定されて居るかを明らかにするのでなければ、吾々は哲學として存在論哲學を見ることが困難なではなからうか。カントは直覺的悟性の總合に於て總合判斷を見る限りその分析的先驗論理の範疇を思辨的論理學の範疇に轉廻して、一度は内在的合理性の客觀的實在を自我の自己否定に於て見ると共にこれを契機とする絶対思惟に於て初めて自我の眞の自覺としての總合的統一の見解に於てその意圖とするところの先天總合判斷を見得べき立場に臨んで居る。隨つてカントに於てもこの内在的合理性の客觀的物自體的存在を絶対思惟に於て總合的に統一せる點を明らかにし、この實在を總合的規定に於てもつ絶対自覺の自我を見、自然に對する人間を見ることが最も重要な事業となつて居るが、ハイデッガーの時間ばかりの絶対自覺の自我の内感の時間として自然の中に於て自然以上の人間の現存在を規定し得る點に於て最も注意さるべきものである。私はハイデッガーがカントの先驗構想力

の問題を介して人間學的哲學に進んで居るけれども、批判の嚴密性からいふときは以上述べた絶對思惟の自我の内感の時間性による演繹から人間學的哲學に入るべきであつて、その上根源的事實に於て見る人間の悟性に於て先驗構想方の問題を論ずべきであると思ふ。それだけに氏の哲學が物自體的事物の絶對思惟に於ける總合的規定を以てその存在論の直接の問題とする點に於て嚴密なる學的形態を備ふべきであることは斷るまでもないところである。自覺的といつても超越的非合理性の絶對として見る外なきイデアをエクジステンツの立場に轉廻してその內在的總合の客觀を明らかにする點に於て絶對的眞理に於ける對象の構成を明瞭にして絶對自我の自覺に於ける思惟の契機を作り、物自體が永久の眞理として客觀的に實在すると共にそれが唯一の思惟の契機として總合的に規定されるといふ立場、吾々自身からいへば總合的にこれを規定するといふ立場に於て物自體その物も吾々自身の絶對的思惟に於てはその自覺的知識實在の立場に止揚せられ、吾々自身の生命の客觀的方面を明らかにするといふ批判の必然的眞理を明らかにするのがカントの批判の眼目であつて、こゝにカントは先天總合判斷を見ると共に實は人間學的存在論の立場をとつて居るのである。カントの存在は物自體的事物を總合規定に於てもつ絶對自我のエクジステンツである。私はこのやうな意味に於て現代の存在論哲學のエクジステンツには多大の眞理を認めるに拘らず、否、これを認めらるから益々カントがその批判に於て非合理性の物自體を內在的合理性の客觀的實在としてのエクジ

ステテンツの立場に轉廻し、イデアの眞理をエクジステンツに於て現はにしてこれを思惟の絶對的眞理の契機とすべきことを示せる點には十分の注意を拂はねばならぬものと信じ、この點に於て『先驗分析論』に於ける『經驗の類推』を中心とせる論文に第一注意したいと思ふのである。

勿論カントの物自體の概念はその『純粹理性批判』に於ても一様に考へられて居らぬ。現在のところ私は『先驗分析論』に於て時間の先驗的圖式の限定に於て必然的に認識の限界とせられる物自體についていふのみであるが、カントが總合命題の總合といふことにその理性批判の中心命題を置く限りこのことは先づ最も重要な命題として考へらるべきことでなければならぬのであつて、この點に於てカントがイデアとしての非合理性の物自體をエクジステンツとしての内在的合理性の立場に轉廻し、隨つてこれを思惟の契機とする絶對的思惟の總合的規定に於て物自體を觀察すべき最も注意すべき立場の闡明に於て、有限に對する無限の眞理を發見するのみならず、なほ無限の有限に於ける眞理その物の存在を發見すべき途往きを明らかにせるを省みずしては、カントの批判哲學が判らねば又現代の存在論哲學も判る途のないことは私のこゝに斷言し得るところである。勿論今もいつた如く吾々自身の生命から見るときはこの物自體の總合的規定といつてもなほその客觀的方面を示すものに過ぎぬのであつて、生命その物の主體的把握を示すものではない。隨つて人間學的存在論哲學の問題は只今のところでは全く觸れるに由もない問題であるが、その解決には必ず物自體

を總合的規定に於てもつ自覺的知識實在の存在構造を明らかにする思辨論學の範疇の辨證法的演繹を客觀的眞理とせぬときは生命その物は明らかとならぬことは私のこゝに斷言し得るところである。生命に於て總合的に規定されたる物自體は元來生命の否定である。併し否定に於てもち得る限りは生命は元來この物自體をその固有の方法に於て内含して居らねばならぬのであつて、一度これを否定に於て對自的に現はすからそれを契機とする思辨に於て自覺に達し得るのである。私はこれ等の點については後に精細に論述したいと考へる。こゝでは只この哲學もカントがイデアとしての物自體をエクジステンツに轉廻して見、その内在的合理性を明らかにする『先驗分析論』に注意する點から進まねばならぬことを論述するのみである。物自體については後に改めて詳論するつもりであるから今論ずる必要はないが、カントが極限に於て認めた物自體は比量性の總體性を直覺性の全體性に止揚せる立場に於て觀察せらるべきものであると共に、その直覺に於ける時間圖式は内面的必然的に空間圖式を要求し、この圖式に於てイデアとしての非合理性の物自體をエクジステンツとしての内在的合理性の物自體に轉廻することはその原則論に於て十分理解せねばならぬことであつて、カントがその演繹論に於て最も重要視するところの自己意識は自我の單純なる表象に過ぎぬがこれによつて主觀に於ける一切の多様が自發的に興へられるといふ根本概念は物自體をこのエクジステンツから止揚する絶對自我の自覺でなければ見ること能はざるところである。随つて又カント

がその原則論に於て最も重要視するところの總ての對象は可能的經驗に於ける直觀の多様の総合的統一の必然的制約の下にあるといふことも結局この総合的規定に於てでなければ認められぬことである。カントの『先驗分析論』の原則は演繹の客觀的方面を明らかにせるものに過ぎぬのであるからなほこれを主觀的方面に止揚して考へねばならぬ理由もこゝにあるのであつて、その限りカントの原則が生命その物の對象認識として實踐的認識の形式を有することは想像するに難くない。

総合命題の判断でなければ眞の総合は見られぬから第一版に於てカントは「心」の根源に進み、殊に第二版に於ては神的又は直覺的悟性に於て総合を見んとする企圖を立てたが、この悟性をも只直覺に於て見る限りなほ分析命題の觀察たるを免れぬからこれを総合命題に於て見ねばならぬといふのが私の以上述べたる一切の批判の基底である。絶對的起原の意味といつても只これを直覺に於て見るのみでは必然的にその内感の時間を手引きとして演繹するのみであるから、その部分的限定は意味その物を實現すること能はぬのであつて、時間の演繹では一切の総合の根據としての永遠その物を示し得るものでないといふ點に於てこの時間圖式の背後に空間圖式を豫想し、空間の内在する時間としてカントの先驗演繹は意味あるものとなるのである。随つて又その限りカントの分析的先驗論理の範疇は必然的に思辨論理の範疇となりその辨證法的演繹に於て客觀的實在の個物の現存在を内在的合理性に於て肯定し、その固有の方法による非合理性の存在を承認しながらその総合的規

定の絶對思惟を認めねばならぬのである。「觀念論論駁」についてはカントの批判は非難を受けることが多いけれども、直覺的悟性の總合に於て總合命題の總合を求め哲學を求め限りこの論駁の事物概念は必然的に承認せられねばならぬところであつて、カントの批判に於てはその命題に於て既に述べた如く先驗論理の範疇を思辨論理の範疇に進めざるを得ぬ限り、イデアとしての物自體をエクスステンツとしての物自體に轉位する點に於て内在的合理性としての事物を見、隨つて又必然的にこの節に於ける事物概念を見ると共に、辨證法的思惟の自覺に於て一切の總合及びその原則を明らかにする方向に向つて自覺的に進むものと見ねばならぬ。

この議論は勿論文字通りにカントの演繹論を見るものではないのであるけれども、今もいつた如く總合命題の總合を直覺的悟性に求めるカントの根本精神の必然的結論でなければならぬのであつて、物自體もイデアとして見る限りなほ形相的單一體として部分の理性的聯關のない全體であるに過ぎぬけれども、エクスステンツとして見る限り事實的個別體として理性的聯關を有する全體である。それ自體内在的合理性の個別的全體的實在である。直覺それ自體では直觀は同時に思惟であるといつても論理的には未だ何等の思惟をも實現せざるものを自覺的に思惟すべき唯一の契機となし、「心」それ自身が精神として自覺的に思惟すべき機會となすのである。正に「心」が自己否定に於て客觀的實在を肯定しこれを契機として思惟する自覺に歸るのであつて、この自覺の精神に於ては

自我は直接その内容の絶對的眞理を介して對象を構成するのである。この點は吾々の最も注意すべきところである。「心」それ自體に於ては直觀することが思惟することであるとか、又直觀によつて同時に對象が與へられるとかいふけれども、かゝる直觀又は對象は質料それ自體であるに過ぎぬ。吾々の經驗に於て有する對象でない。獨立の意味を有せるものでないから必然的に既にも述べた如く範疇と結合して意味を構成する外なく、意味に於て實在するの外ない。併しこの意味もなほイデアとしては要するに多様の聯關のない形相的單一體としての形態に過ぎぬのであるが、その内的規定の時間の内的必然性が空間の内在を介して事實的多樣體の客觀的實在の定立を導き、内在的合理性の物自體的實在としての對象を構成して「心」はその自覺としての精神に於て自己自身の固有の内容たる絶對的眞理を介してこの對象を思惟する點に於て初めて對象を具體的に見るのである。

私はカントの對象は總合的統一の必然的制約の下に立つとする原則はこの點に於て積極的に理解さるべきものと思ふ。一體もとカントの原則は數學的原則と力學的原則とであつて、『直觀の公理』と『知覺の豫料』とは前者に屬し、『經驗の類推』と『經驗的思惟一般の公準』とは後者に屬して居る。カントは『直觀の公理』から『知覺の豫料』に至つて先驗構想方の意味を一層深く解し、隨つて「心」の根源的統一に於ける意味を深く解して經驗の意味を論理的には直覺的悟性の總合にまで深めて行くのであつて、「心」の根源的統一に於て直觀と思惟とを相即的に結合するよりも以上に、意味なく形

態なきところからこれを生ずる理由を明らかにすると共にその客觀的實在を明らかにしたのが『經驗の類推』と『經驗的思惟一般の公準』である。『經驗の類推』では既に述べた如く「心」の根源的統一に於て見る意味としての物自體をそのイデアの立場からエクジステンツの立場に轉廻して思惟の合理的契機を明らかにしたのであるけれども、これだけではなほ内在的合理的契機を明らかにしたといふのみであつて、それ以上に現存在の對象その物を明らかにして居るのではない。これを明らかにしたのは『經驗的思惟一般の公準』であつて、この公準の節に至つてカントは初めて客觀的實在の物自體的事物がその非合理性のまゝ内在的合理性の對象として吾々自身の絶對自我の思惟の契機であることを明らかにしたのである。カントの批判に於ては直覺的悟性の總合が中心命題である限り自我は自己自身の絶對眞理を介して絶對實在の客觀それ自體を構成し、然も自己自身固有の方法によつて存在せる非合理性の客觀的實在その物をその内在的合理性に於て肯定して、これを絶對自覺の思惟の契機となすのであると共にその思辨的論理の範疇は分析的先驗論理の範疇と異なつてこの客觀的實在の對象その物を無限の有限への限定に於て個物その物たらしめ、現存在の事物その物たらしめるのである。この點に於てカントの『經驗の類推』と『經驗的思惟一般の公準』とは相携へてその原則の概念を明らかにするになければならぬのであつて、カントが『一切の總合判斷の最高原則について』に於て對象の必然的制約を明らかにせる原則概念を更らに具體的に發展し事物の認識を

明らかにせるものといつてよい。

カントのこの節に於ける原則を以て先天總合判斷一般を明らかにすべき原則であるとする思想は廣く世の中に行はれて居る。またカント自身も諸種の場合にこの原則概念を抱いて居るのであるけれども、これはその範疇を以て分析的先驗論理の範疇となす場合に承認せられることであつて、總合命題の總合判斷を目標として直覺的悟性の總合判斷論に進み、思辨論理學の範疇の辨證法的演繹を以て眞の演繹となさねばならぬカントの批判の本來の立場に於ては承認さるべき思想でない。この場合の演繹に於てはその辨證法的なる必然の論理として絶對自我は自己否定に於て客觀的實在を肯定し、然も物自體的個物に於てこれを肯定せねばならぬのであつて、自己固有の方法によつて存在する非合理性の個物でありながらその否定に於て見る內在的合理性の總合原則を承認せねばならぬ。これがカントの『先驗分析論』の原則概念でなければならぬのであつて、カントはこの原則を明らかにして客觀を見ると共に、その內在的合理性を思惟の契機とする絶對自我の自覺的思惟に歸るものといつてよい。随つてこの客觀的實在を思惟の契機とする絶對自我の絶對自覺の思惟は如何なるものであるか、又この思惟の總合的規定の下に於ける客觀的實在の物自體的物事その物が如何なる存在形態を有すべきかといふことが最も重要な新問題でなければならぬのであつて、こゝに吾々は眞の意味に於て總合命題の總合判斷を見ると共に又眞の意味に於ける最高原則を見ねばなら

ぬのであるが、これが人間學的に込み入れる問題であることは既にも一言したところである。

(未完)